

『常陸国風土記』の「倭武天皇」像

―「井」に関する伝承を通して―

加 野 友 理

一 はじめに

『常陸国風土記』を読んでまず感じるのは井泉や池に関わる伝承の多いことである。それは常陸国の土地の豊かさを物語るとともに古代の人々の生活にこれら水源がいかに重要な役割を果たしていたか示すものである。今回は古代の井泉のもつ意義について同じく頻繁に登場する「池」との比較を通して調べ、『常陸国風土記』において井泉伝承が記載された意図について考えたい。その上で、当風土記で独自の地位を示す「倭武天皇」の存在について、井泉伝承を通して言及したい。

二 風土記の「井」と「池」

当風土記にみられる井泉伝承は次の十一例である。

- ① 倭武天皇、東の夷の国を巡狩りて、新治の県に幸過ししに、国造毘那良珠命を遣して新たに井を掘らしめたまひき。流泉淨く澄み、尤好愛し。時に、乗輿を停めて、水を甃て手を洗いたまふ。御衣の袖、泉に垂りて沾ぢぬ。便ち、袖を漬す義に依りて、此の国の名とす（総記）
- ② 昔、美麻貴天皇馭宇めたまひし世に、東夷の荒ぶる賊を平討けむ為に、新治国造が祖、名をば比奈良珠命と曰ふを遣しき。此の人罷り到りて、即ち新しき井を穿るに、其の水淨く流る。乃りて井を治りしを以ちて、因りて郡の号に着けき（新治郡）
- ③ 郡の北十里に碓井あり。古老曰へらく、「大足日子天皇、浮島の帳宮に幸ししに、水の供御無かりき。即ち、卜部を遣わして占訪はしめ、所々を穿らしめたまひき。今も雄栗の村に存り（信太郡）
- ④ 郡の東十里に、桑原の岳あり。昔、倭武天皇、岳の上に停留まりたまひき。御膳を進奉る時に、水部をして新たに清井を掘らしめたまふ。出泉淨く香しく、飲喫ふに尤好し、勅して云りたまひしく、「能く淳れる水かも」とのりまひき。是によりて、里の名を、今、田余と謂ふ（茨城郡）
- ⑤ 倭建天皇、天の下を巡狩でまして、海の北を征平げたまひき。是に、此の国を経過ぎ、即ち槻野の清泉に頓幸し、水に臨みて手を洗い、玉を以ちて井を尊びたまひき。今も行方里の中に存りて、玉の清井と謂ふ（行方郡）
- ⑥ 郡の東に国社あり。此を県祇と号く。中に寒泉あり。大井と謂ふ。郡に縁れる男女、今も集いて汲み飲めり（行方郡）

⑦

石村の玉穂の宮に大八洲駈しめしし天皇のみ世、人あり。箭括の氏の麻多智、郡より西の谷の葦原を截ひ、壑闢きて新に田に治りき。此の時、夜刀の神、相群れ引率て、悉盡に到来たり、左右に防障へて、耕佃らしむることなし。(俗いはく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。其の形は、蛇の身にして頭に角あり。率引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず。凡て、此の郡の側の郊原に甚多に住めり。)是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、甲鎧を着被けて、自身仗を執り、打殺し駈逐らひき。乃ち、山口に至り、標の悦を堺の堀に置いて、夜刀の神に告げていひしく、『此より上は神の地と為すことを聴さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後には、吾、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。冀はくは、な崇りそ、な恨みそ』といふ。社を設けて、初めて祭りき』といへり。即ち、還、耕田一十町餘を發して、麻多智の子孫、相ひ承けて祭を致し、今に至るまで絶えず。其の後に、難波長柄豊前大宮臨軒天皇の世に至りて、壬生連磨、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめき。時に、夜刀の神、池の辺の椎・槻に昇り集ひ、時を経れども去らず。是に、磨、声を挙げて大言びていはく、「此の池を修めしむるは、要す孟めて民を活かすにあり。何の神、誰の祇ぞ、風化に従はぬ」といひて、即ち、役の民に令りて云はく、「目に見る雑の物、魚虫の類は、憚り懼るるところなく、随尽に打殺せ」と言ひ了る応時ち、神しき蛇避り隠りき。謂はゆる其の池は、今、椎井と号く。池の面に椎株あり。清泉出づれば、井を取りて池に名づく(行方郡)

⑧

郡の東二三里に、高松浜あり。…東西の松の下に出泉あり。

八九歩ばかり、淨く渟りて太だ好し(香島郡)

⑨

倭武天皇、此の浜に停宿りたまひき。御膳を差め奉る時に、都て水無し。即ち鹿の角を執りて地を地すに、其折れたりき(香島郡)

⑩

郡より東北に、粟河を挟みて駅家を置く。…そこより南に当たりて、泉、坂の中に出づ。多に流れて尤淨く、曝井と謂ふ。泉に縁りて居める村落の婦女、夏の月に会集いて、布を浣ひ曝し乾せり(那賀郡)

⑪

高市と称へるあり。此より東北二里に、蜜筑里あり。村の中に淨き泉あり。俗、大井といふ。洽く冬温かなり。湧き流れて川と成る夏の暑き時には、遠近の郷里より酒と肴とを齎賣きて、男女会集ひて休ひ遊び飲み樂しぶ(久慈郡)

そもそも「井」はどのようなものを指すのだろうか。「鑿(穿)」「掘」とあるので現存する井戸と同じ構造であるようにも思われるが、「多に流れて」「湧き流れて川と成る」という記述からは、整備された井戸というよりも湧水の源すなわち泉、井の頭といったものを想像したほうが妥当である。鐘方正樹氏によれば、当時の井戸はほとんどが素掘りの井戸で、井戸枠を有する例は少ない。鑄方貞亮氏は⑦「謂はゆる其の池は、今、椎井と号く」を根拠として「井と池は同一の内容である」とされ、また青木紀元氏も同じ見方を示されているが、「井を取りて池に名づく」とあるからにはやはりふたつの語は区別されて用いられていると考えるのがよいと思われる。また動詞に注目した場合、「井」が「ホル(穿掘)」が五例、「アリ」二例なのに対し、「池」が「キヅク(築)」三例、「ツクル」三例、「ヲサム」一例、「アリ」一例であることから、「井」と「池」

を同一のものとするのは不適当である。さらに「泉」に伴う動詞を示すと、「ナガル（流）」二例、「アリ」二例、「イツ（出）」二例、「フル（旧）」一例となっている。「泉」はその地に既にあったものとして記録されていることから、「井」とは異なる、自然物であると考えるべきである。「池」「井」について古字書類を見ると、『倭名類聚抄』には

井 四聲字苑云、鑿_レ地取_レ水也
池 玉篇云、池直離反蓄_レ水也

とある。当風土記の用例でも多くの場合「井」は貯水の為というより飲料水を調達するために求められる。また、『説文解字注』には「池、陂也」とある。「陂」の項に

陂得_レ訓池者、陂言_二其外之障_一、池言_二其中所_レ畜之水_一

とあることから、「池」は貯水のために周りを囲った溜め池・堤である と解釈できる。それに對し、「井」は③④にあるように「水の供御」「御膳」とするために掘られており、飲料水として用いることのできる清潔な水源を「井」を呼んでいたことがわかる。

三 「井」の特別性

「井」に関わる人物にも注目すると、「池」が高向大夫、壬生連磨、当麻大夫、輕直里麻呂といったいわゆる朝廷から位を与えられた官人であるのに対し、「井」では倭武天皇、大足日子天皇、比奈良珠命といった天皇が中心となっており、比奈良珠命も国造であるが、天皇からの勅命

であることが明確にされている。天皇（ここではヤマトタケルも含める）という存在は朝廷の権力の象徴であるが、風土記ではそれ以上に巡行神的な性質を帯びるのはすでに指摘されるところである。また、鐘方正樹氏によれば、井戸を掘削する要件は地質的要件にあまり左右されず、井戸杵を築るための共通の技術が地域差なく広がっていたという。中央政権の技術が特別に必要なわけではないのである。つまり天皇に結び付けて語られる井泉伝承は朝廷の権力やもたらす技術の偉大さを示すものというよりも、その土地の人々の生活を支える「井」そのものが、ただの井戸ではなく誰から見ても神聖で特別なものであることを示すためにその起源を天皇に求めたとみるのが正しいと考えられる。それら伝承の多くが地名起源伝承につながれていることはこれを裏付けている。

森浩一氏によると、西日本では早くから平地を開発の中心に置き、その灌漑形態が「水路灌漑から溜池灌漑へ」という流れを持つのに對し、坂東では初期集落が台地上に形成され、戦国期に至るまで降ることがなかったという村落の経営事情に對して「溜池灌漑から水路灌漑へ」という流れがあったという。これは『常陸国風土記』に井泉や池の伝承が多く収められていることの理由のひとつであり、またこうした事情が水源たる「井」をさらに共同体にとって不可欠なものとしたとも考えられる。おそらく、朝廷の教化が進むことで共同体が強化され、生活が閉鎖的になるにつれ必要となる生活施設の一つに「井」があるのであり、「井」は生活の象徴として神聖視されるようになった。仮に国家事業として「井」がつくられるならば⑦の「池」に関する例のように、「夜刀神」などの土着の神に妨害されることもあろう。人々に飲み水を提供し、後に男女の憩いや祭りの場となっていた「井」は「池」よりも素朴な信仰の対象であった。『古事記』でも仁徳天皇が朝夕に淡路島から飲料水

として「寒水」を汲んで来させている。現在「御井の清水」と呼ばれるその水源そのものが神聖視されていたからこそ、わざわざ船で調達したのである。

四 常陸の人々から見た中央権力とヤマトタケル

『常陸国風土記』の特色として、ヤマトタケルが「倭武天皇」として重要な役割を持つて多く登場することが挙げられる。当風土記では四五の地名起源伝承があるが、そのおよそ三分の一にこの人物が関わっている。しかしながら「倭武天皇」には記紀にみられるヤマトタケルのような勇猛さや残虐さ、また悲劇の英雄としての性格は与えられていないために同一人物の伝承であるとは考え難い。『常陸国風土記』においてヤマトタケルは、どの天皇の御世にも属さない、漠然とした中央権力の象徴だったのではないだろうか。この視点から井泉伝承をもう一度読む。

まず、①と②の用例を見ると、両例とも国造ヒナラスノミコトが井をつくっているにもかかわらず、①では明らかに倭武天皇を主役としている。説話の発生は①より②が古いと考えられるため、ヒナラスノミコトの役割の重要性に変化があることは注目すべきである。全体を通して黒坂命などの在地首長よりも倭武天皇の活躍が目立つことと併せて考えるに、これは常陸国が大和朝廷に吸収されていく過程を示すものではないだろうか。仁藤敦史氏は『古代王権と祭儀』の中で、天皇の行幸の目的について以下のように述べている。

第一に、在地首長層がそれ以前に執行してきた様々な機能を大王に委譲する儀礼の場として行幸がまず利用されたと確認できる（服属儀礼）。第二に、行幸は在地首長層から委譲された機能を大王自らが確認、行使する場であったといえる（国見・国讃め・狩猟・征旅）

これに基づいて考えるならば、常陸国に直接巡幸している倭武天皇の存在は、常陸国の支配層が在地首長層から朝廷に移りゆく時代の象徴であるといえるだろう。『常陸国風土記』の宮名記載に注目すると、成務天皇以降についてはほとんどに宮名が記されているのに対し、垂仁天皇・景行天皇、そして倭武天皇に関してはなにも記載がない。風土記の伝承はそれぞれが独立したものであり時代認識に比較的無頓着であると言われているが、『常陸国風土記』の宮名記載の変化からは天皇制に基づく一定の時代認識が読み取れる。景行天皇・倭武天皇という巡行する天皇の時代が終わって後に宮名記載が始まるということは、常陸国の支配権が在地豪族から中央権力に移行していく様子を意図し、書き分けた結果ではないだろうか。また記紀と違い、倭武天皇は景行天皇の時代に属すわけでも、他の天皇の治世に属すわけでもない人物として描かれている。『常陸国風土記』において倭武天皇は中央権力が常陸国に浸透していく時代の象徴的存在として描かれており、それは在地の人々にとっては中央権力の漠然とした威勢を示すものとして受け止められたであろう。

支配権の移行を表す存在でありながら倭武天皇の伝承に武力を用いた征伐の要素が少ないのは、巡行する天皇としての役割を与えられているからだけではなく、当時の在地首長層に大和朝廷に対抗しうる勢力がまだなかったからということが考えられる。当風土記における武力行使による誅伐の例を挙げると以下のようになる。

I 国果と呼ばれる山の佐伯・野の佐伯が、黒坂命により死に散く
（茨城郡）

II 山の佐伯・野の佐伯が、黒坂命により規り滅ばされる（茨城郡）

Ⅲ 夜刀の神が、水田開発を妨害したことで麻多智により打ち殺し追いやられる（行方郡）

Ⅳ 夜刀の神が、池の堤の築造を妨害したことで壬生連磨の命令により避け隠れる（行方郡）

Ⅴ 国栖の夜尺斯・夜筑斯をはじめとする荒ぶる賊が、建借間命により焼き殺される（行方郡）

Ⅵ 鳥日子という佐伯が、倭武天皇に逆らったためにその場で殺される（行方郡）

Ⅶ 寸津毘古という国栖が、無礼な態度を示したために倭武天皇に斬り殺される（行方郡）

Ⅷ 土雲という国栖が、兎上命によって誅滅させられる（久慈郡）

これらを見るに、誅伐される在地勢力側からの攻撃は妨害・反抗程度にとどまり、誅伐する側に決定的な痛手を負わせるだけの力はないようである。Ⅵ・Ⅶでは倭武天皇も土着民を殺しているが、それぞれ「逆命」「違命」を理由にしているため、はじめから誅伐するつもりであったのではなく、巡行中の出来事のひとつでしかないことがわかる。中央権力が常陸国に浸透する過程でこのような小さな反抗勢力との戦いはあったであろうが、大半の地方首長層は、国造制下で地方を支配領有する地位を得るために自ら朝廷の教化に従い主権を委譲し、またそれと連動して伝承上の地位も中央権力に譲ることとなった。

当風土記で地名起源伝承に結びつけられる井伝承の主人公はもとも在地の英雄であった可能性が強いが、『常陸国風土記』に記録されるべきは倭武天皇であった。逆に、Ⅳの「池」に関する説話は、壬生連磨のような在地首長層が朝廷の権力下で、土地占有権や水利権、さらに祭祀

権を掌握する形で在地農民層の支配を進めていったことを示すものである。「池」はある程度の規模の農業開発が前提となつて造築されるものであるが、「井」は人々の生活にまず必要なものである。その「井」の起源に結びつく倭武天皇は、残虐さから切り離された聖なる存在としてあり、人々に恩恵と祝福をもたらす英雄として描かれている。それは自らの生活の中心となる「井」を高めたいという在地の人々の要請だけでなく、古くから朝廷の恩恵を受けてきたことをアピールすることで朝廷の歡心を買ひ、征伐の対象から外されることを狙っているとも考えられる。

とはいえ、前述したとおり井泉伝承の本来の目的は生活基盤としての井をほめることである。井の起源を朝廷を象徴する「天皇」の行為というあり方に求め、そうしてできた伝承が、しばしば文化的功績を持つ『常陸国風土記』独特のヤマトタケル像を生むこととなった。さらにそれが、朝廷の教化が進み中央権力の影響が強まっていく時勢と合うものであったことが説話としての完成度を高めることとなった。これがヤマトタケルが『常陸国風土記』で天皇とされる理由として考えられるうちのひとつではないかと考えている。

五 まとめ

以上『常陸国風土記』の井泉伝承とそこから読み取れる倭武天皇の存在意義について考察してきたが、まとめると次のようになる。「井」が指すものは蓄水のための池と異なり、主に飲料水を取るために掘られたもので、井戸枠の有無は不明であり、湧き水を一時的に溜めるための工夫と見るのが正確である。井泉は特別な掘削技術のいらない代わりに土地の人々の素朴な信仰の対象となり、憩いや祭りの場となった。その土

地の井泉の特別性を強調するためにヤマトタケルを利用したが、それらを読むと在地の首長譚が倭武天皇像を経て中央権力へと移行する様が垣間見える。中央権力に対抗しうる武力を持たない在地首長層は、時勢に適応すべくその支配権とともに伝承上の地位も中央権力の象徴に譲ることとなった。生活基盤、つまり文化的基盤である水源の起源と中央権力の象徴ヤマトタケルを結びつけたことで、人々に恩恵を与える当風土記独自の文化的英雄「倭武天皇」が誕生することになった。その一方で、治水や産物を誉めることで常陸国の人々と密接に結びついた倭武天皇は、『常陸国風土記』独自の天皇像としてそこで充足し、記紀に描かれるような朝廷を中心にした物語や複雑な人格を与えられなかったとも考えられる。

参考文献

- ・『常陸国風土記』訓読分引用は『常陸国風土記』（沖森卓也ほか編著、山川出版社、二〇〇七）による
- ・鐘方正樹著『ものが語る歴史8 井戸の考古学』（同成社、二〇〇三）
- ・鑄方貞亮著『古代前期の産業経済』（中央公論社、一九四八）
- ・青木紀元著『日本古代の「井」に対する神聖観』（神道史研究、一九五五）
- ・森浩一編『日本古代文化の探求・池』（社会思想社、一九七八）
- ・黛弘道編『古代王権と祭儀』（吉川弘文館、一九九〇）
- ・谷口雅博『常陸国風土記』の時代認識（東京大学国語国文学会編『国語と国文学』八一巻一一号、二〇〇四、十一月）